

〔講演録〕

両陛下 虔みと愛の歌

竹本忠雄（筑波大学名誉教授）

いま、この瞬間に、天皇皇后両陛下のおわします日本に、皆さまと同時にこうして生きていられる幸せをかみしめ、両陛下への心からの感謝の念を胸に、しばしお話をさせていただきたいと思えます。

生ける伝説という言葉がありますが、美智子さまはもう長い間、日本国民にとってそのようなご存在でありました。まだ正田家の令嬢でいらしたころの皇太子殿下との出会い、そして悩みと苦しみの後のご結婚の決意、入内^{じゅだい}されてからは古いしきたりの宮中で、また新たなる悩みと苦しみを味わい、しかしそれを非常なる忍耐と虔みをもって乗り越えられ、皇后となられてからは陛下と常に軌を一にして、日本全国巡幸を重ねてこられました。また海外旅行といっても、観光などというものでは少しもなく、しばしば反日の怨念の強く生きつづけている国々をじっと耐えつつ巡り、その上にさらに慰霊の旅をも重ねてきておられます。すでに古希のときにサイパン島にまでお行きになりました。こうしてこのたび、めでたく傘寿を迎えられたのでありますけれども、それもけっして私ども民間でいうような引退蟄居というふうなことでは毛頭ないのであります。太平洋戦争の激戦地であったペリリュー島へこれから（平成26年11月現在）両陛下うちそろって赴かれるという、いま現在そのご準備の途上にあらせられるのです。今日までのお二方の歩みをかいまみだけでも私どもが背筋をぴんとせざるを得ないような、つねに天皇陛下とともに、それほどの世にもまれなる高い、凜乎たる生き方をされてきたお方が、皇后陛下美智子さまにほかなりません。

多くの優れた才能をお持ちでいらっしゃるし、学者としても大成されたでありますし、つとに、若くして文学に秀でておられました。音楽家として、特にピアニストとしても一流でいらっしゃいます。多くの海外の一流音楽家と共演なさいましたが、その中の一人、メニューインいわく、「美智子さまは稀なるジョイント・プレーヤー——共なる祈りであり共演者であらせられる」、そのように名言を残しております。

こうした、そのどの一つを取っても余人の遠く及ばないような優れた数々の才能をお持ちである中でも、ひとときわ抜きんでているものが和歌の道なのであります。非常な名歌を数多く詠んでこられました。そこには、才能というだけではない、目に見えない資質として、美智子さまなればこそその美德として、特に私共が忘れてはならない大事な一点を挙げなければなりません。それは、虔^{まこと}みであります。「慎」というよりも、敬虔の「虔」の字を充てねばならないようなご心性でありまして、今日はそのことに特に留意しつつお話しさせていただきたいと存じます。